

2023fy こころサイエンスカレッジ「動機～選好・感情～」スケジュール

・日程・会場・講師等については変更する可能性があります。今後調整

| 日程 | 先生おなまえ（敬称略） | 所属 | タイトル | 抄録又は研究概要 |
|--------|-------------|---------------------------------------|------------------------------------|--|
| 8月31日 | 精神と動機 | | | |
| 木 | 村井 俊哉 | 医学研究科 教授 | 動機づけの精神医学 | 精神科では様々な種類の心の不調の治療や支援を行っている。これらの心の不調の多くは「動機づけの不調」という観点から理解することもできる。動機づけの不調には、「動機づけの量的異常」（動機づけが多すぎたり過ぎたり少なすぎたりする）や「動機づけの質的異常」（同期づけの方向が偏っていたり柔軟な切り替えができない）が含まれる。個々人においてどのような不調が起きているのかを理解することは、適切な治療や支援の第一歩となる。 |
| オンライン | 野田 智美 | 医学研究科 研究員 | 動機と選好という観点からみた食行動とその異常 | ヒトの行動は、報酬への接近と罰の回避という動機づけによって方向づけられる。「食べる」という行為は、生命維持に向けて報酬に接近する極めて原始的な動機づけによるものである。しかし、「食べる」という普通の行動が普通に出来なくなる疾患がある。摂食障害とよばれるこの疾患では、食べ物が罰として感じられ、食事を回避するようになる。本講義では、食べ物への接近と回避という動機づけの観点から摂食障害の病理を概観する。 |
| 10月3日 | 動機における言葉 | | | |
| 火 | 中山 真孝 | 人と社会の未来研究院 特定講師 | テキストから読み取る感情（仮） | 感情は人々を動機づけ、行動を駆動し、ウェルビーイングの元となるものである。また人々は感情について話し、話の中で感情を読み取るようとする。本講義では、人々の言葉・テキストから感情を読み取る技術の心理学的応用についての研究事例を紹介する。「畏敬」感情の意味の分析といった基礎的研究から、日々の幸福感やコロナ下での人々の感情の変化のモニタリング、共感性の測定、といった応用に近い事例まで紹介する。 |
| オンライン | 伊藤 孝行 | 情報学研究科 教授 | ハイパーデモクラシーを目指して：AIによる合意形成支援システムの実現 | 筆者らは、ソフトウェアエージェントと人間と一緒に参加するソーシャルネットワークでの民主主義（ハイパーデモクラシー）のための合意形成プラットフォームの実現を目標として研究を進めている。AI、スマホ、インターネットなどの急激な発展とCovid-19による急激な環境の変化により、新しい社会システムの実現が一層現実味を帯びている。具体的には、議論プラットフォームの中に、AIエージェントを常駐させ、人間の代理として働き、意思決定やインタラクションを仲介し、より良い合意形成や集団意思決定を支援する。本発表では、本研究プロジェクトの経緯と今後の展望についてのべる。 |
| 10月26日 | 関係性と動機 | | | |
| 木 | 上田 竜平 | 人と社会の未来研究院 助教 | 「恋愛関係構築の動機づけを支える脳のメカニズム」 | 特定の他者との恋愛関係は、ヒト社会において普遍的に観察されます。その一方で、どのような脳神経機構が関係構築の動機づけを支えているかという問題は、2000年代以降になってから検討されてきた、比較的新しい研究分野です。本講義ではこれまでに得られている知見を概説することで、「なぜ我々ヒトは特定の相手との長期的・排他的な関係を築くのか」という問題について考えます。 |
| オンライン | 関口 格 | 経済研究所 教授 | 関係性と経済的動機 | 経済学者相手に研究をしているわたしにとって、動機とは経済的動機で、要は損得勘定に基づく動機である。ところで経済というものは、お客と店のモノの売り買いであれ、勤務先の雇用関係であれ、企業間の利潤獲得競争であれ、複数の当事者を巻き込む一つの社会である。ここには関係性が存在し、それは当事者の損得勘定に影響する。この講義は特に長期的関係という関係性に着目し、損得勘定および人々の行動の帰結に与える影響を考える。 |
| 11月21日 | しない・できないと動機 | | | |
| 火 | 山本 真也 | 高等研究院 准教授 | 「できるけどしない：認知的制約と動機的制約」（仮） | ヒトは、できるのにしないことが多々ある。これは進化の隣人であるチンパンジーでも同じである。近年の研究から、チンパンジーが社会的・文化的行動の認知基盤を持ちながら、日常生活や認知課題ではこれらを行動として示さない例がいくつも見つかった。私は彼らの「しない」を説明するために4つの仮説を提案したが、そのうちの3つは認知的制約というより動機的制約に関連するものである。なぜ「できる」けど「しない」のかを議論し、人間社会を見つめなおすきっかけとしたい。 |
| オンライン | 小川 正晃 | 医学研究科 特定准教授 | 期待外れを乗り越える神経メカニズム | 結果が期待に沿わずに「期待外れ」が生じてもそれを乗り越える意欲は、将来の成功のために不可欠です。従来、そのような意欲を心理学的に想定する研究はありましたが、神経メカニズムは不明でした。私達は、これまで期待外れに対して活動を下げると考えられてきた中脳のドーパミン細胞の一部が、期待外れに対して活動を上げ、期待外れを乗り越える行動を駆動できることを見出しました。その最新の研究についてご紹介いたします。 |
| 12月8日 | 動機における記憶 | | | |
| 金 | 月浦 崇 | 人間・環境学研究科 教授 | 報酬へのモチベーションによって影響を受けるヒト記憶の神経メカニズム | 金銭的報酬を得ようとする（金銭的罰を避けようとする）モチベーションによって変化するヒトの記憶とその神経メカニズムについて、fMRIを用いた研究を紹介します。 |
| 京都会場 | 朴 白順 | 人間・環境学研究科 特定助教 | 外傷性脳損傷患者における動機づけの障害とその影響 | 前半では、前頭葉の異なる領域を損傷した3名の局所性（限局的な病変）脳損傷例を通して、動機づけの障害に起因する行動の特徴を、後半では、びまん性（広範囲な病変）脳損傷例における、動機づけとFuture thinking（未来思考）との関連性をご紹介したいと考えています。 |
| 1月29日 | 様々な動機 | | | |
| 月 | 高橋 雄介 | 国際高等教育院 准教授 | 動機づけと原因帰属の教育心理学 | 昨今の頻回に渡る大きな環境の変化に対応すべく、成功や失敗から自律的に学び続けることのできる個人や組織で在ることが求められています。私たちがそのような存在に近づくためには、そもそも、学ぶもしくは教えるとはどのような営みとして行われるのかを理解する必要があります。本報告では、動機づけや原因帰属に関して、教育心理学研究がこれまでに明らかにしてきた基礎的な知見を概説し、最近の動向もあわせて紹介します。 |
| 東京会場 | 永田素彦 | 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻人間・社会・思想講座、防災研究所 教授 | 動機の関係的基盤(仮) | 活気ある組織を作るにはどうすればよいのか。何が組織に活気をもたらすのか。伝統的には個々のメンバーがもつ動機、すなわち内発的動機あるいは外発的動機がカギだとされてきた。それに対して最近では、動機は（個人ではなく）関係の産物であるという考え方が登場している。本発表では、そのような考え方の基礎としてケネス・ガーゲンの協応行為(co-action)の理論を紹介し、活気ある組織へのいくつかのポイントを示す。 |
| 2月14日 | 他者と動機 | | | |
| 火 | 上田祥行 | 人と社会の未来研究院 特定講師 | 感情による行動の動機づけと対人相互作用 | 感情は私たちの行動を動機づける要素である。感情による行動の動機づけは自身の感情に基づくだけでなく、他者の表情などから相手の意図や感情を推測し、それに基づくこともある。本講演では、特に人と人がインタラクションする場面に焦点を当てて、感情による行動の動機づけに関する研究を紹介し、自他の感情が社会的な認知やコミュニケーションのための基盤となっていることを議論する。 |
| オンライン | 池田 香織 | 医学研究科 講師 | 糖尿病患者の気分・感情と食行動の関係 | 糖尿病の治療では、適切な食習慣を長期に維持することが求められる。好きなものを好きな時に好きなだけ食べたいという欲求を抑え、食事を管理することは容易なことではない。食事はコミュニケーションの手段でもあるため、糖尿病患者は食事療法を含めた様々なストレス要因に対処して、糖尿病と付き合っていく必要がある。患者の気分や感情と食行動の関係を検討することで、よりよい介入方法を検討している。 |
| 3月4日 | 現代における動機 | | | |
| 月 | 畑中 千紘 | 教育学研究科 准教授 | 現代における動機と主張性 | こころは時代・社会の変化に応じて様々な影響を受けている。中でも、行動の動機となるような主張的・主体的なこころのエネルギーに関してはその影響が大きい。本講義では心理検査を用いた調査研究を素材に、現代社会を生きる人の主張性のあり方について議論する。 |
| オンライン | 福間 真悟 | 医学研究科 准教授 | 健康のための行動デザイン | たとえ健康のために良いと分かっている、人はそのように行動できません。行動の積み重ねが大きく影響する慢性疾患（高血圧、糖尿病、脂質異常、慢性腎臓病、心血管病）が増加、重症化し、個人の健康を損なうだけでなく、医療利用の増加など、現代社会の大きな負担となっています。データから健康行動の課題を捉え、どのような動機づけでその行動を変えることができるのか、科学的なエビデンスとその社会実装の取り組みを紹介します。 |